
棺のクロエ 1 棺と少年

義忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棺のクロエ1 棺と少年

【Nコード】

N0832L

【作者名】

義忠

【あらすじ】

砂塵舞う辺境の地に、棺を背負って旅する機人^{マシーナレイ}の少年クロエ。街道で行き倒れていた彼は、スクラップ業者の娘チャムに拾われるものの、彼を追って機族^{マシーナレイ・トライブ}の大部隊が襲い掛かる！ 200対1の絶対不利な激闘の結末は 辺境の大地に繰り広げられる機械幻想^{マシーナレイ・ファンタジー}！

砂漠を越えて吹き渡る風は、肌を灼く熱を孕んでいた。

日差しは生きとし生ける者への憎悪を剥き出しにし、少年の小柄な身体をあぶる。

小柄　と一言で片づけたが、身の丈で言えばむしろ子供並み。そのくせ、肩幅だけは妙にがっしりとしているのは、服の下に防具プロテクタでも着込んでいるのか。

頭にはその短軀と不似合いなほど大きなつば広の日よけ帽をかぶり、身には長くて白いぼろぼろのコート。それで隠せない肌の露出部分には紫外線除けか、白い細布でぐるぐる捲きになっている。その姿は、南方の大陸に伝わるという屍者の埋葬方を思わせなくもない。

「……………」
もはや言葉すら発する余裕もないのか、少年は無言で身体を前方へと押し込むように一歩づつ進む。

だが、その背には少年の身の丈より大きな白い棺つひが背負われ、その身を押しつぶさんとするかのようにのしかかっていた。少年も時折、身体をゆすって背中にかかる荷重を調整しているようだが、だからといって投げ出す気もないようだった。

少年と棺つひの進む道路は、広い道幅のまっすぐに伸びる道で、車線の多さからするとかつては幹線道路として使用されていたと思われる。だが、もう何年も手入れがされていないのか、道のそこかしこで路面を割って草が生え、道の窪みには砂が吹き溜まっている。

道路わきには時折、真っ黒に焼け焦げた戦車やトラックの残骸が転がっていた。中には高熱でねじ曲がった砲身を、それでも天に向けて突き出して擱座かくざする対空戦闘車輛まであった。

だが、そうした苛烈な戦いくさの痕跡に目をやることもなく、少年は歩き続ける。

しかしその内、その足がもつれ始めた。はじめはわずかに歩幅が

乱れるくらいだったのが、明らかにバランスを崩し、背中の棺が大きく揺れ始める。

「くそっ……っ！」

唸るように罵る少年だったが、洩れる息の荒さは隠しようもなかった。

やがて路面の割れ目につまずき、そのまま支えきれずにその場に膝をつく。

「……………っ！」

あえぐように大きく息をつくが、肺に流れ込むのは炎とまがえるほどの熱量を孕んだ大気だけ。

そのまま背中の棺に押し潰されるように、路上に倒れこむ。

棺の下から小さなうめきが微かに洩れたが、すぐに途絶えた。もがく様子もなく、ほどなく少年の身体は動きを止める。

そして古戦場でもある打ち捨てられた街道は、吹きすさぶ熱風の奏でる風音だけの支配する世界に戻った。

「……………ダタの街は、あれはもうダメだな。ガナシユの親父まで店を畳むとなると、もうまともに品をさばける業者がいなくなっちゃう」
荒れた路面状況を睨んで巧みにハンドルをさばきながら唸る叔父の愚痴に、助手席のチャムはため息まじりに肯いた。

「この辺を荒し廻ってる兵隊崩れの機族どもが悪いんでしょ。バムーラの南なんて、危なっかしくて昼間も外を出歩けないっていうじゃない。軍隊がちゃんと仕事してりゃあ、こんなことにはならないのよ。そのくせ、税金だけしっかり持ってきやがって」

チャムの知る限り「窓ガラス」などという高尚なものが入っていた試しのないサイドドアの窓から吹き込む風に目を細め、くすんだ金髪をかきあげる。湿度が低いおかげで、こうして直射日光を避けられる車内から風に当たる分には、それなりに涼しくはあった。まあ、それも多少の砂埃を我慢すれば、という条件つきではあったが。

そんなチャムに叔父はなだめるように言った。

「>同盟<との国境が近いからな。うかつに機族討伐ってわけにや
いかんのさ。保安官の爺っちゃんも言ってたろ」

「機族ども追い払ってくれるなら、同盟の軍隊でもいいわよ」

「おいおい」

鼻白む叔父の横で、チャムはつまらなさそうに言い放った。

「どつちにしたって、こっちは商売上がったりじゃない。何にもで
きないんなら、せめて税金くらい下げろって　っ!？」

そのとき、視界の片隅を掠めた「何か」に引掛かったチャムは、
車窓から首を突き出して、流れ去る後方へと目をやった。

「おい、チャム!」

「叔父さん、止めて!」

おんぼろトラックが急ブレーキに悲鳴を上げる。それを気に止め
るでもなく、蹴飛ばすようにしてドアを開けると、チャムは路上に
転がり出た。

「おい、チャム。何だってんだ!？」

訊ねる叔父の声を背中であきながら、しかしそれに応えもせず
一目散に走るチャムは、やがて「それ」に辿りついた。

背中に背負った棺おくぼこに押し潰されるように、路上に倒れる少年の下

へ

「ちょっと、あんた、大丈夫?」

言いながら少年の腕を揺さぶったチャムは、その手を覆う細布の
隙間から垣間見えた「地肌」に気付き、息を呑んだ。

「おい、チャム、何がどうなってるんだ?」

「叔父さん、この子　「荒い息を吐きながら追いついた叔父を振
り返り、チャムは金属で出来た少年の手を取って呟いた。

「機族だわ」

その定義には諸説あるが、短く見積もって三〇年、長く見れば半世紀にも渡って繰り広げられた「帝国」と「同盟」の戦争が終結したのは五年ほど前の話だ。

だが、当初はよくある地域紛争としてだらだらと無駄に長く続けられてきたこの戦争が、双方、抜き差しならない総力戦に発展してしまったのは、この両国の国境地帯に横たわる大砂漠の地下に莫大な地下資源が眠っていることが判ってしまったから 戦争も最後の一〇年間でのことだ。

それでも誰もいない砂漠のど真ん中で殴り合っている分には迷惑も少なかったのだが、ほどなくそれでは埒が明かないことに両軍共に気づいた。砂漠を横切る長大な兵站線を苦勞して維持するより、その北方に広がる森林地帯を迂回して、敵の後方策源地を叩く方が効率的だという結論に達したのだ。

そんなわけで、チャム達の暮らすこの 帝国 西方辺境領域は苛烈な戦場と化すこととなった。

折も折り、両軍の兵装は急速に機械化が進んでいた。そもそも、軍だけでなく社会全体の機械化の進展が、大砂漠の地下資源を必要としたが故の戦争であり、そうであるからこそ、互いに引くに引けない総力戦にまで発展してしまったという事情もある。

機械化された両軍は、森を切り拓き、田畑を潰し、軍用道路を次々に開通させ、山野を掘り返して重厚な縦深陣地に変えた。

敵の拠点には大口径の砲弾を次々に叩き込み、射界を確保するため、敵に隠れる場所を与えないためと称して、森や村を焼夷弾で焼き払った。

湖は埋め立てられ、補給や偵察に使う飛行船や航空隊の基地になった。

その結果、木々を喪い、保水能力がなくなった森林地帯は、次々

に砂漠に呑み込まれてゆく。

こうして幾度かの大会戦を経て共に国力の限界に達した両国は、決め手を欠いたままうやむやの内に停戦に至ることとなったのだが、戦場となった西方辺境領地域が元の緑と水に溢れる豊かな大地に戻ることはなかった。

戦争の末期、兵力の枯渇に悩んだ両軍は、戦場で手足を喪^{うしな}った将兵に機械の手足を与え戦力として戦場に復帰させることを考えた。限界ぎりぎりまで行われた動員体制は、既に後方で社会を支える生産者人口にまで深刻な影響を与えつつあり、文字通り使える者なら病人や怪我人にさえ銃を持たせて戦場に送り込みかねないところまで、両軍の司令部は精神的に追い詰められていた。

当初は単純な構造の義手や義足を支給するくらいだったのだが、戦争の激化と期を一にした急速な機械生体学の発達により、本来の人間の手足の代用品としての機能を越え、戦闘に最適化された「人間の兵器化」へと突き進むことになる。

これが「マシーナリイ機人」もしくは「マシーナリイ・トライブ機族」である。

だが、戦争に最適化された彼らの存在は、戦争の終結によって意味を喪^{うしな}うこととなる。

問題は機械に置き換えられた手足だけではない。「兵器」として最大の機能を発するよう調整されてしまった彼らの精神の多くは、戦後の平和な社会に適応できなかったのだ。

一方、停戦条約で定められた条項により、両軍とも大規模な兵力の配置ができなくなった西方辺境領地域は、混沌とした無法地帯と陥っていた。

戦争に特化した総力戦経済体制から平和な時代に適した産業構造への転換は、スイッチを切り替えるようには簡単にはいかない。必然として大規模な景気後退^{リセッション}が引き起こされる。その影響は特に中原^{ハートランド}

より辺境地帯に激しく頭あついれる。資本の蓄積やインフラの整備が不足しているから、資金流入の減少の影響が出やすいのだ。元より、戦前の主力産業だった農業や林業は見る影もなく、大砂漠の地下資源開発も停戦条約で向こう一〇年棚上げとあっては、戦場から返ってきた復員兵達に与えられる仕事なぞどこにもあるうはずもなかった。加えて、両軍の遺棄兵器や機械車がそこら中に転がっているとなれば、あちこちで盗賊団が徘徊するようになるのも時間の問題だったと言える。

そうした盗賊団を取り締まれる戦力は、軍にも自治体警察にもなかったが、その内に縄張りを巡って盗賊団どうしで殺し合いを始めるようになり、力のある盗賊団を中心に合従連衡が行われていった。そんな中で生き残ってゆく盗賊団の多くは、頭目や幹部の多くを機人が占める盗賊団だった。

単純に固体として機人の方が一般の兵士より戦闘能力が高いということもあったが、戦争末期に前線配備された機人には、機械車と接続することによって車輛や火器の自動操作が可能な者が多かったことも理由として挙げられる。

重武装の機械車で部隊を編成し、村々や街道を荒らし廻るのがこつした盗賊団の基本的なスタイルだったから、行き場をなくした機人の納まりどころとしては妥当なところではあった。

そして彼ら機人に率いられた盗賊団の多くは、かつての軍隊時代への郷愁からか、「機族」と自ら称する者が少なくなかった。

かくして、この西方辺境領地域では「機人」や「機族」と言えば、ろくでなしの無法者アウトローとして忌み嫌われるようになっていたのだった。

ろくに具も入っていないスープを弟達の皿によそっていたチャムは、寢室から突如聞こえてきた獣のような咆哮に危つく皿を取り落とすところだった。

「ようやっとお目覚めか……」

小さく呟くと、怯えて縋りつく妹の頭を優しく撫でて安心させてから、少年を寝かせている両親の寝室へと向かった。と言って、掘っ立て小屋に毛の生えたような小さな我が家のレイアウトでは、リビングからほん数歩の距離でしかない。

ほとんど意識することもなく腰の後ろのホルスターに手を廻し、信号銃を改造した対機人拳銃の銃把を握る。父の遺品のこの銃を使わずに済むよう祈ってはいたが、それでもいざとなればまずはぶっ放せというのが辺境エッジでのルールだ。

明かりを消した室内では、ベットのうえで上半身を起こした少年が荒い息を吐き、額を機械の掌で押さえていた。帽子を脱がせてみれば意外に長かったその黒髪は、寝ぐせもあつてか興奮した獣のように逆立っている。

悪い夢でも見たのか、とチャムは思ったが、単純にそう思っただけで、それ以上の感慨はない。

別に夢でうなされるのは、何もこの道で拾った少年の専売特許ではない。自分にもある。辺境に住んでいれば、悪夢のひとつやふたつくらい適当な折り合いをつけて生きてゆかねばならない。

ただ、首から下、すべてが機械化されているこの機人の少年の見る悪夢は、さぞや酷いものなのだろうなとも思ったが、それを訊いてどうなるものでもない。

なので、そのことには触れず、まずは必要なことから訊くことにした。

「あんだ、名前は？」

「……………」
冥くらい地の底から地上を見上げるように目を細めてこちらを見る少年は、しばらく無言でチャムの顔を眺めてから、ぼそりと告げた。

「……………クロエ……………」

「そ」肯き、続ける。

「あたしはチャム。叔父さんを手伝って、この辺でスクラップ業者をやっている。ダタの街に回収した部品を卸しに行った帰りに、行き

倒れていたあなたを見つけて拾ったの」

「……………」

クロエと名乗った少年は、感謝というより猜疑に満ちた視線でチャムを睨む。

礼の一言もなしかよ、と思いはしたものの、ならば遠慮なく金の話を持ち出せるというものだ。

「悪いけど親切でやってあげたってわけじゃないの。あたしはスクラップ業者は、道に転がる遺棄兵器やら邪魔な機械車輛やらの残骸を片づけておまんまをいただいててね。道のど真ん中で行き倒れる機人のガキを拾ってくるのも、仕事の内ってわけ」

「……………」

「あなたがそのままくたばっててくれたら、丁重に吊ってあげて、あなたの身ぐるみ一式がその代金になってたところだけど、めでたく生きてたことだし、感謝の気持ちは判りやすく示してもらえとお互いに」

「金なら、ない」

「…………ま、んなこつたらろうと思ってたから、いいけどね。じゃあ、代わりになる物だったら何だっていいわよ。機械部品の類たぐいなら、いくらでも金に換えられるし。何なら、腕の一本でも…………って聞いてんの、あなた？」

チャムの台詞を無視して、クロエはしきりに周囲を探っている。

「こつちも幼い弟と妹抱えて、呑気に慈善事業やってられる余裕はないんだからさ。だいたい、あなたのその重い身体とあの荷物を運んでくるだけでもひと苦労だったんだからね。せめてガス代と手間賃くらいは」

「荷物」という単語に反応したのか、クロエはたとチャムを睨む。

「……………棺はどこだ？」

「ひ、棺？」真剣、というより血走った色の浮かぶ瞳に、チャムは思わずたじろいだ。

「あんなもの、ウチの中に入れられるわけないでしょ。表のガレ-

ジで、叔父さんが今ばらして……」

その台詞を皆まで聞かず、クロエはベッドから跳ね起きると、チャムの脇を抜けて寝室から飛び出そうとする。

「ちよつと！」

チャムの抗議の声を無視してリビングに出たクロエは、素早く周囲を眺め廻して外への出口を確認すると、身体ごとぶつかるようにして外へと繋がるドアへと突進してゆく。

「おい、こらちよつと待て！」

大人びた顔立ちの頭部に、一〇歳になる弟と同じくらいの背丈という奇妙な組み合わせのクロエの背中を追って、チャムもやむなく外へ向かう。

「お姉ちゃん！」

「ごめん、先によそつて食べてて」

背中越しに弟達にそう告げ、クロエを追って外へ飛び出す。

「あんの、バカっ！」

罵りつつ、対機人拳銃をホルスターから引き抜く。棺ひつねについて問いたですクロエの表情は尋常ではなかった。どうも拾った地雷の信管に触れてしまったらしい。事と次第によっては、引き金を引かねばならない羽目になりかねなかったが、形成炸薬を使用したこの銃の弾頭は、クロエの胸板くらい簡単に貫いて高温のジェット・フォイル熱噴流を体内に流し込んでくれるだろう。問題は、もともと信号銃を流用した程度の代物なので、よほどの至近距離でなければ当たらないということだ。

「使わないで済めば、それに越したことはないんだけど……」

安全装置を外しながら銃を両手で構え、ガレージを目指す。

回収した車輛の分解整備などを行うガレージは、歩いて数歩の叔父の家のそばにある。明かりの洩れるそこへと辿りつく前に、派手な破碎音が聞こえてきた。

「叔父さん！」

そのまま中に飛び込みたかったが、戸口で一旦立ち留まって銃を

握る腕だけを先に突き出したのは、辺境に生きる娘の嗜みたしなという奴だった。機人の手足の届く距離にうかつに近づいて、なます切りにされる趣味もない。

見れば、機械油の染み込んだコンクリの床の上で、作業着姿の叔父が腕を押さえ、うつぶせになって呻いている。クロエは？ 銃身と視線の軸を決して逸らさないようにしながら、ガレージ内を素早く走査する。

いた。ガレージの奥で、クロエが棺ひつぎに取り付いてしきりに表面を撫で廻している。

「動くな！」

銃を向けたままその背中に怒鳴ってみたが、反応はない。ガン無視かよ、この野郎。ム力つく感情に促されつつ、それでもクロエの背中にいつでも対機人弾を叩き込めるように銃口は逸らさぬまま、慎重に近づいてゆく。

それに気づいているのかいないのか。ひとしきり棺ひつぎを撫で廻すのにも気が済んだか、クロエは安堵の吐息について顔を上げた。

「……無事か……」

「無事か、じゃない！」

銃口から飛び出している対機人弾の膨らんだ弾頭を、クロエの後頭部に突きつける。

「動くんじゃないわよ。まずあなたの右腕のロックから外す。右腕を外したら、次は左腕。それから両足首。つまらないこと考えたら、すぐに撃つからね」

「おい」

「あなたの意見はいらない。あなたの全身をばらしてからなら、ゆっくり話を聞いてあげる」

言いながら、クロエの右腕の付け根を手早くまさぐってゆく。すぐに腕をボディに固定するロック部分らしき引っかけを見つけ出し、外そうとした。

「って、何これ、帝国の標準規格品じゃない？」

ロック部分の上に薄いスリット上のパネルが付いていた。砂塵避けかしら。同盟系の部品でもあまり見ない仕様ね。整備士稼業の性で、ついついそちらに意識がいつてしまったその瞬間、すとクロエの身体が沈みこむ。

あつ、と思ったときには既に足を払われ、尻もちをついて床に倒されていた。

「……っ、痛っっ！」

呻いたものの、はたと気づいて銃を構え直す。が、その手に握られていたはずの銃は、いつの間にかクロエの手の中にあつた。

「物騒なものを振り廻すんだな」

「う、うるさいっ！」

言いながら安全装置を掛け、弾頭を外す。細かい作業に向いているとはとても思えない無骨な金属の指は器用に動き、次いで弾頭発射用の空砲まで抜いて対機人拳銃を完全に無力化した。その上でくると銃を回転させ、銃把をチャムの方へ差し出す。

「返す」

そっけなく告げるクロエの手から、チャムはひったくるようにして拳銃を取り返した。

「別にお前達を傷つけないわけじゃない」

「あつたり前でしょっ！」反射的に怒鳴り返してから、叔父の安否に意識が向いた。

「叔父さん！」

慌てて駆け寄るその背中に、クロエは素直に謝罪の言葉を口にした。

「すまない」

「すまないって、あんたねえ……」

「こいつには触ってもらいたくなかつた」

言いながら、棺の表面を再び撫でる。その横顔には複雑な翳が差していたが、無論、今のチャムは同情してやりたい気分ではない。

「何なの、それ？」

チャムの問いに、簡潔極まりない回答が返ってきた。

「棺だ」

「見りゃあ、判るわよ。そうじゃなくて、中に何が入ってるのかって訊いてんのよ！」

「……………」

それ以上の答えはなかった。また無視か。この野郎。

よもや本当に屍体でも入ってるのかとも疑ったが、しかし叔父とトラックの荷台に運び込んだときの冗談みたいな重さを思い出して即座に否定した。たとえ大人が入っていたって、あんな重さになるはずがない。トラックの荷台に乗せるのに、備え付けのフックアームを使う必要があったのだ。少なくとも、チャムが覚えている棺の重さはあんなに重くはなかった。

まあ、おおかた予備のパーツでも詰まっているのだろう。それにしては棺を見るクロエの陰鬱な表情が気になったが、本人が話したくないというなら、それ以上、突っ込む気にもなれなかった。

むしろどうでもいい。と言うか、こんな疫病神、一刻も早く追いつ出すべきという結論に急速に傾きつつあった。

「もう、金なんかいいから、それ持ってとつとどこにでも」

「待った」チャムの腕を掴み、下から叔父が止める。

「勝手にその子の持ち物をいじろうとしたこつちも悪い」

「だって、叔父さん！」

また叔父の悪いくせが出たか、とチャムは胸でうめいた。戦前のまだ穏やかな時代に育ったためか、叔父には決定的な場面で判断が甘きに走るきらいがあった。根っからの善人であるこの叔父のことは基本的に嫌いではなかったが、時折、家出した息子の苛立ちが判らなくもないチャムだった。

「いや、そうじゃない」チャムの懸念を察してか、情けなさそうに苦笑しながら叔父は右腕を掲げて見せた。

「どうもさつき突き飛ばされたときに、やっちゃったみたいで……………」

「……………」

ぶらんと不自然にぶらさがる叔父の右腕に声にならない悲鳴を上げたチャムは、即座にクロエの方を向き直った。

「あんたっ!」

「迷惑を掛けたことは謝るが」

「このまま行かせると思ってるの?」

「……………」

よほどその時のチャムの表情が凄まじかったのか、肩を掴まれたクロエの仏頂面がわずかに引きつる。

それを見て、ほんのちよつとだけチャムの溜飲がさがった。

ざまあみる。

ガレージから突き飛ばされるようにしてクロエの短軀が姿を現わし、次いでこの家の者らしき若い娘とその後ろを右腕を押さえた作業着姿の中年男性がついてゆく。

高感度の光増幅式モニターグラス越しに遠くからそれを眺めていた男は、独り言のように呟いた。

「…………ええ、再び捕捉しました。どうやら地元の住民に拾われたようで、さっそくひと悶着起こしてますよ」

フルフェイスのヘルメットの下から含み笑いを洩らす。そのヘルメットに覆われた頭部も含め、無骨なプロテクターで固められた全身のライダースーツから足のブーツまで、闇のような黒で固めている。

その姿でまたがるのは、巨大なフロントノーズを突き出したモニターバイク。前後両輪のタイヤは大人の胴回りほどもありそうな太さで、それを流線形の艶めかしいラインのカウルが包んでいる。ライダー同様、車体もすべてが漆黒に塗られ、こうして陽もとつぷりと落ちた辺境の宵闇にたたずめば、シルエットは簡単に闇に溶け込んでしまいそうだった。

「棺つひですか? ええ、一緒に回収されたようです。テレメトリーは

依然、良好。特に障害の兆候はありません」

そう報告を終えてから、ここにはいない相手から意外な返事が来たのか、男は軽く小首を傾げた。

「……お言葉ですが、今の彼に見合う相手となると　ああ、待つてください。二〇キロほど南方の旧街道を熱源が移動中ですね。規模からして申し分ない。こいつらにしましょう」

肯くと男はもう一度、モニターグラスを手にとってクロエの姿を捉えた。元の小屋のドアの前で、腰に手をあてた娘から何事か命じられているのをむすつとした表情でおとなしく聞いている。遠目で見れば、何やら姉に叱られる弟のような凶ではある。

「……ま、愉しみに待つてなよ。いい退屈しのぎにしてやるから」
そう嬉しそうに呟くと、男はスターターを捻ってエンジンを吹かし、モンスターバイクを目覚めさせた。急速に高まる甲高い排気音はその辺りの機族どもが乗りまわしているバイクとはまったく次元の違う、凶暴なポテンシャルを予感させる。あるいは、邪悪な魔物の哄笑にでも例えるべきか。

そしてその巨体を驚くほど軽やかに操り、その場で車体を旋回させると、爆発するような加速を解放して男とバイクはその場を去った。

チャムがクロ工を引き留めたのは、勿論、唐突に親切心に目覚めたからではない。

叔父の骨折によつて致命的に不足する男手を埋め合わせるためである。

大袈裟な話をしていのではない。叔父夫婦には息子がひとりいたが、三年前に家を飛び出してそれっきり。以来、体調を崩して伏せがちな叔母をこの炎天下に引つ張り出すわけにはいかないし、チャムの弟と妹はそれぞれまだ一〇歳と八歳でこれもさすがに戦力対象外。村の若い衆に声を掛けたくとも、仕事を頼めそうな年頃の男達はとつくに村に見切りをつけて出て行ってしまっている。後はいずこも似たり寄つたりの事情で、詰まるところこの村に余剰の労働力など存在しないのだ。この氏素性の知れない機人の少年を除いては。

それに村長からの依頼で引き受けた、村外れの荒地地に転がる遺棄兵器の解体作業がある。地下水脈の流れが変わってしまったため、次の雨季までにこの荒地地を貫いて導水路を掘り上げなければ、村にわずかに残つた耕作地が使いものにならなくなる。

と言つて、不発弾どころかブービートラップさえ残つていかなない遺棄兵器の回収を、おいそれと素人にやらせるわけにはいかない。実際、プロであるチャムの両親も、回収作業中の爆発事故で死んだのだ。

その点、対機人拳銃を瞬く間に無力化したクロ工の手際の良さを見る限り、武器を取り扱うことに慣れていそう、仕事を任せても大丈夫そうだった。

そんなわけで、押し付けがましく一宿一飯の恩義。飯はまだ喰わせていなかったが、を持ち出して、叔父の怪我が治るまでクロ工に仕事を手伝うよう命じたのだ。

「……………」

むっつりと黙って話を聞いていたクロエだったが、別に反論ひとつするでもなく、翌朝、朝食を終えると帽子とコートを手にとって何も言わずにトラックの荷台に自分から乗り込んだ。

自分でもそれなりに悪いことしたと反省でもしてるのかしら……。そうだ、と本人が素直に自分から口にしそうもないことをつらつら考えても始まらない。現場に着いたら遠慮なくこき使うことにして、事実、その通りにした。

あれをやれ、これをやれと矢継ぎ早に出されるチャムの支持に、クロエは恨みがましい愚痴をこぼすでもなく、黙々と従った。普通の人間ならとても持てそうにない装甲片を軽々担ぎ、不発弾の信管をそつと抜いて弾薬と弾体を分離する。アームフックと自分を直結し、チャムや叔父が手動で操作したのではとてもあり得ないような繊細な作業をこなす。はてはチャムでさえ見落としかけたブービートラップを、器用に解除することさえやってのけた。

まさに八面六臂の大活躍で、実際、叔父とふたりでこなしていた時の数日分の作業が一日で片付きそうな勢いだった。

とは言つものの、それでクロエの仏頂面に「労働への感謝」などという表情が浮かぶでもなく、「これも人生」と丸ごと状況を受け入れて淡々と仕事をこなしているといった風情だった。

いっそ音ぐらい上げてくれれば、まだ可愛げもあるのに……。その内、何だかこっちの方が悪いことをしている気分になってくる。叔父さんのお人好しが伝染ったのかしら。

耐え切れなくなって、作業をしながらあれこれ話しかけてみたものの、クロエは作業に必要なこと以外、一切口を開こうとはしなかった。

特に「どこから来たの?」とか「この後、どこに向かうつもり?」といった類の質問は無視。勿論、棺の中身や「どの生まれ?」といった個人のプロフィール的な話題になると、質問自体、頭から聞いてなかったようにきれいにスルーされた。

……こ、この野郎〜っ。

まあ、これだけ無視されても、なおも懲りずに質問を繰り返す自分も、随分な負けず嫌いだと思わないでもなかったのだけれど。

「クロエ見なかった？」

訊ねるチャムに、リビングのテーブルで妹の勉強を見ていた弟が元気よく答えた。

「ガレージの方に行くって言ってたよ！」「言ってた！」

弟の台詞を、舌つ足らずな口調が追いかける。

クロエがこの家に転がり込んでから、何だかんだと数日が経っていた。

その間、クロエは相変わらずの仏頂面なのだが、どうも弟や妹達からはあっさり懐かれているようだった。

まあ、子供はああいう見てくれが面白いのが好きだからなあ……。本人に聞かせるには極めて失礼千万なことを考えつつ、ガレージへと足を向ける。

今日は叔父夫婦が叔母の定期健診で隣村の病院まで通うのにトラックを使うため、現場での作業はお休み。どの道、この数日で回収した部品や機材の整備をしなくてはならないので、終日、敷地内での作業を行うことになった。

それはそれでやらねばならない仕事如山積みで、さっそくこき使つてやるうと思つたら、いない。それであちこち覗いて探して廻っている、という次第だった。

ガレージの前まで着くと、シャッターが子供の背丈分ほど開いている。

砂が入るから、あれほど開けたらすぐ締めると言ったのに！

本気で一発ぶん殴つてやるうか、という気分で身を屈めてシャッターの中を覗くと、クロエが棺かひこに取り付いて何やらいじっている。

と、棺かひこの下の辺りの蓋が開き、クロエはそこから箱のようなもの

を引つ張り出した。

それを持って、あらかじめ床に広げられたシートの上に置く。そしてそこに自分も腰を下ろし、箱の蓋を開いて工具のような物を取り出すと順番に並べてゆく。

ひととおり作業の準備が終わったのか、今度は自分の右腕を引き抜いた。

そこまで見届けて、クロエが自分の身体の整備をしようとしていることに気づいた。

「う〜ん……」

何だろう。足と左手だけで、器用に自分の右腕の分解整備を始めるクロエの姿を見てみると、胸の奥がなんだかもやもやしてくる。

「あー、もう、面倒くさい奴！」

そのままガレージの中に入ると、クロエの前まできて腰を下ろす。

「……………?」

怪訝な表情で見上げるクロエの手から、右腕をひったくる。

「おい」

「片手でやるより、ちゃんと腕が二本ある人間がやった方がましでしょよ」

「……………」

「まったく、目の前にちゃんとしたプロの整備士がいるってのに、そいつに任せないだなんて、どれだけ他人を信用してないんだっつーの。ムカつく。あー、もう、本当、ムカつく。そのブラシ、貸して」

「あ、ああ……」

あっけに取られた様子で、クロエが機械清掃用のブラシをチャムに渡す。もっとも、気恥ずかしくて顔を上げられないので、クロエがどんな顔をしているのかチャムには良く判らない。

うう、何をやってるんだ、あたしは……。

それでも手際よくブラシで部品の隙間に紛れ込んだ砂粒を掻き出してゆく。

お互いに何を話すでもなく、チャムは右腕の清掃を行い、クロエもそれを黙って見ている。

「気まずい。すごく気まずい。」

何か話した方がいいのだろうか、何を話せというのか。大概のことは、とつくに質問済みですべて無視されている。ここでまた無視されたらよけい気まずくなるではないか。

つか、そもそもこの状況をこいつは「気まずい」と感じているのだろうか。思ってたら、何か自分で話題くらい振ってくるわよね。それさえないと言うことは、本当に何とも思っていないのか。

「ってか、何で「こいつが何を考えているのか？」なんてことをあたしが考えなくちゃならないのか。」

「あ、だんだんムカついてきた。」

落ち着こう。いいから落ち着こう。何もこいつと喧嘩がしたくてこんなことをしているわけではないのだ。

「……というか、そもそも何であたしはこんなところでこんなことを」

自分でも何が何だかよく判らなくなってきた。

ちらりとクロエの方に目をやる。こつちも何を考えているのか、むつつりと自分の右腕にブラシを掛けるチャムの手の動きをじっと見つめている。

その貌^{かお}だけを見る限り、歳は一六〇七歳といったところか。背丈がアレなので勝手に歳下扱いしてきたが、自分とさほど歳は違わなさそうだ。

ただ、それで機人というのが良く判らない。

その歳で戦時中に機人化されていたとしたら、チャムの弟とさほど変わらない歳で機人化していることになる。しかし、成長期の子供を機人化すると、肉体部分が成長して機械部分をその都度造り直さなくてはならなくなる。そうした理由から、終戦間際の切羽詰った状況でも行われなかったと聞く。

あるいは戦後になって、病気が怪我が原因で機人化したというこ

となのかもしれないが、機人化なんてそうおいそれと民間で手が出せるものではない。この腕一本だって、べらぼうな費用が掛かっているはずだ。

それが何でまた、こんな田舎の街道で野垂れ死にしかけてたのか……？

訊いても答えしてくれなさそうだしなあ、と攻めあぐね……ふと気づく。

そういえば、自分の方だって、何も話してないや、と。

「……この辺りはね、戦争が激しくなって割と早い時期に戦場になったから、あたしも弟達も疎開先で生まれたの」

「……何の話だ？」

「間が持たないから、身の上話をしてるだけ。聞く気ないならそこで寝てなさい。勝手に話すから」

「……………」

その勝手な言い草にクロエはわずかに眉をしかめたものの、特に面と向かって拒絶するでもなかったので、チャムは先を続けることにした。

「弟達は小さかったから覚えてないだろうけど、あたしは疎開先でこの村がいかに素敵なところかって両親から聞かされて、辿りついたらこんな有様。元の疎開先に戻りたいって、わんわん泣いて父さんや母さんを困らせたものよ。そこも大概、貧乏な村だったけど、ここよりはずっとましだったもの。」

でもまあ、どっちかっていうと疎開先から追い出されてここに戻る羽目になったみたいだから、子供が泣いたくらいでどうなるものでもなかったんだけど」

チャムはブラシを小さな物に持ち替え、指の微細な機構の隙間に詰まった砂を取り除きにかかる。

「父さんと叔父さん、それと叔父さんの息子が疎開先と軍隊で機械

整備の資格を取って、どこからトラックも都合できたっていうんでこの商売を始めたの。

最初の内は復興特需で順調だったみたいだけど、その内、どんどんお上の仕事先細りし始めて。機族の連中もうるつくようになって状態のいい車輛とか遺棄兵器とか勝手に持ち出すようになるし、昨日まであなたにも手伝ってもらってたようないるヤバげな状態のものにまで手を出さなくちゃならなくなっただけ。

終戦の次の年だったかな。父さんと母さんが不発弾の処理に失敗して、あたしの目の前でドカン。叔父さんの息子はそれをきっかけに家出。叔母さんは寝込んで、弟も妹もまだ小さいし、しょうがないから、あたしも叔父さんの手伝いをするようになったの。

そこまで話して、チャムはいつのまにかブラシを持つ手の動きを止めていたことに気づいた。

何故だろう。辺境ではどこにでも転がっているような、ありふれた話でしかないのに、いつもそう言い聞かせてきているのに、いざ実際に自分の口から吐き出してみると、胸に重苦しい何かがつかえている自分に気づいた。

「……で？」

「……聞いてたの？」

「聞かせたかったんじゃないのか？」

訊ねるクロエに今の自分の表情を見せる気になれず、手元の作業に視線を落とす。

「別に。言ったでしょ、間がもたなかったって。それに身の上話っていったって、そんなものよ。別に珍しくもない。この辺じゃ、よくある話」

言うてから、自分の中にあるもうひとつの感情に気づく。

「でも、そうね。あたしはやっぱこの村が嫌い。この村に来て、いいことなんて何にもなかったもの。」

だけど、弟や妹や、叔父さんや叔母さん達を置いて、この村を出

れない自分も知ってる。そんな勇氣はないのよ。いろんなものを断ち切って、振り返らずに出てゆくなんで、あたしには無理。

だから、ひとりで旅をしているあんたのことが、ちょっと羨ましいのかもね」

苦笑を浮かべつつ、チャムは自分でも思いもよらないところまで気持ち吐き出していたことを後悔していた。本当は、こんなことまで口にするつもりはなかったのに。

こんなすぐにいなくなるような氏素性の知れない旅人の、それも無愛想極まりないこの機人の少年に、自分は何を期待していたというのか。

胸の中で沸き起こる自分自身への嫌悪感にかすかに表情を曇らせるチャムへ、クロエは一言だけ、

「そうか」

とだけ答え、口を閉じた。

再び沈黙が戻ってくる。

だが、その沈黙には、何かが受け留められたような柔らかさがあった。

まあ、今はこれならそう悪くもないか、と胸で呟き、チャムはその沈黙に素直に身を委ねることにした。

やがて右腕のブラシ掛けもひととおり終了する。

だが、整備士としての本能がなおいつその分解整備の必要を囁いていた。大砂漠から飛んでくる砂粒の粒子は細かく、ねじ止めされたパネルの下にも容易に紛れ込む。クロエが工具類を出していたのも、徹底した分解清掃の必要を考えてのことだろう。

さてどうばらすか、と改めて右腕の全体を見直し、そこでふとこの右腕の放つ異様な気配に気づいた。

何だろう、と一瞬迷い、すぐに答えに気づいた。上腕部にあるアクセスパネルを固定するネジの規格が、標準品とは微妙に異なっ

いる。いや、ネジだけではない。腕全体の設計構造自体、これまでチャムの見たことのない代物だった。

それでいて、既存の 帝国 の機械類の延長線上にあるような「匂い」を感じもする。だがそれは、機械技術の進化の過程を一步步登っていったというより、何かいきなり何段階か跳躍しているかのような印象があつた。それも、とてつもなく邪悪なやり方で。

「……これは、何？」

「知らなくていい」

クロエは静かに告げた。

「ハイランド 中原の最新技術 っただけじゃないわね。だいたい、内臓まで機械化した機人なんて、噂でだって聞いたことないもの。それに現場で重い物を持たせたときの、重量トルクの流し方だって……」

「おまえは、知らなくていい！」

クロエは自分の右腕を掴み、激しく咆える。

初めて叩きつけられたクロエの激情に、チャムは思わずその手を離す。

と同時に、まっすぐに覗き込むクロエのその両目もまた人間そっくりの。だが、まぎれもなく機械で出来た瞳であることに気づく。こんな田舎のしがたない整備士とはいえ技術者の端くれであるチャムには、それが技術進化の文脈を無視した、次元の違う世界の産物であることが判つた。

そして……あの棺柩。

ついさつきまでただの大きな邪魔くさい箱でしかなかったあの棺柩が、急にひどく禍々しい存在に思えてきた。

「おい」

クロエが声を掛ける。思わず振り向いたそこで、ひどく傷ついた表情の少年に出会い。それが、自分が隠しきれなかつた怯えによるものだと、即座に気付かされた。

「……う、うめん……」

「いや、いい。気にするな」

短く告げ、右腕を肩に嵌め込む。

たまりかねて、チャムが声を掛けようとしたとき、戸外から近づくエンジン音に気付いた。

「叔父さん達かしら……？」

それにしても戻るのが早かったし、エンジン音も軽い　気筒数の少ないバイクのエンジン音がひとつ。

「お客さんでも来たのかしら……」

言いながら腰を上げるチャムの横で、クロエは慌ただしく工具類を片づけ始めていた。明らかに警戒心を剥き出しにしている。

それをまるで、人に慣れない猫みたいだと思いつながら、チャムはガレージを後にした。

門の外で待っていたのは意外な人物だった。

「……よう、久しぶりだな、チャム」

「兄さん……」

三年前に家出した叔父の息子　チャムから見れば従兄いとこに当たるトランだった。

「何をやってたのよ、三年も！　叔父さんも叔母さんも心配して……」

……ああ、叔母さんは体調崩しちゃって、今日も叔父さんと一緒に隣村の診療所に行つてて、それで　「

「落ち着けよ。親父達が出払ってるのは知ってる。だから、来たんだ」

「……どういう意味……」

すつと思考に冷気が差し込んでくる。

見れば、トランのバイクは空力や操作性より、相手への威嚇を優先したような異形のカウルに覆われた改造車だった。

腰のホルスターにこれ見よがしにぶら下げられている大型拳銃も、命中精度も悪く、ジャム装弾不良を起こしやすい、ハツタリ優先のバカ銃　言い換えれば、機族の三下が好んで欲しがる銃だった。

服も、髪も、安いチンピラのようないでたちで、それらすべてが今のトランの境遇を見事に物語っていた。

イヤだ。イヤだ。イヤだ。

何でこんなことになるのだ。

トランは、疎開先から引越してきて心細い思いをしていたチャムを励ましたり、元気付けてくれた。優しく、頼もしいトラン。復員兵上がりのトランとは歳は少し離れていたが、幼いなりにほのかな恋心のようなものを感じていたことさえある。

それがチャムと一緒に両親が吹き飛ばさまを目の当たりにしたあの時、彼の心の何かがへし折れ、今のこの再会に至ってしまった。

珍しくもない。辺境では、よくある話。当たり前の話。

この村では、こうやって何もかもが砂にまみれて薄汚れてゆくのだ。

いつもの魔法の呪文で呑み込もうとして、うまくいかない自分に気付いた。ダメだ。早く呑み込んでしまわないと、あたしもへし折れてしまう……。

「チャム、中に入れてくれ」

トランが焦れたようにせがむ。

「帰って」やっとの思いで、チャムは告げた。

「叔父さんや叔母さんに、今の兄さんの姿を見せられない」

違う。あたし自身がこれ以上、耐えられそうにない。

「……チャム、中に入れてくれ。おまえに話さなくちゃいけないことがあるんだ」

イヤだ。イヤだ。イヤだ。

子供のように駄々をこねることが許されるなら、チャムはためらわずそうしただろう。この錆の浮いた針金細工のような門扉を開いてしまったら、自分はまたひとつ苛酷な現実を受け入れなくてはならない。

「お前が拾ってきた機人のガキのことだ」

トランの言葉が、再びチャムの心に冷水を浴びせかけた。

「……どこで、その話……」

「中に入れる。詳しい話はそこでしてやる」

「……………」

チャムは力なく門扉を開き、トランを招き入れた。

「あいかわらず、しけてやがんなあ。今でもあれか、仲買人の業者にいいように振り廻されてんだろ。お人好しだもんな、親父は。商売に向いてねえんだよ。その点、お前の親父さんが生きてた頃は

」

「無駄話をしにきたんなら、もう少しましな格好で出直してきて」
吐き捨てるように告げるチャムに言葉に、トランは軽く肩をすくめる。

叔父の家にある事務所に通すと、トランは勝手知ったる態度で来客用のソファアールにどっかと腰を落とした。許しも乞わずに、タバコに火をつけ、ぶしつけに室内を眺め廻しての開口一番があのだ台詞だった。

かつてのトランなら、自分の前ではこんな物言いは決してしなかったろう。それだけでも、この従兄の中より良き何事かが失われたことを示しているようで、たまたまなく悲しかった。

「じゃあ、本題だ。チャム、お前、マシーナライ・ゴット機神トって聞いたことがあるか？」
「兄さん、あたしは無駄話はやめてって」

「心配すんな。繋がるんだよ。ちゃんとあのガキの話にな　で、聞いたことがあるのかないのか、どっちなんだ？」

「……ないわよ」
チャムは溜息まじりに答えた。

「だろうな。この噂は機族の間でしか知られてないしな」
「何なのよ、それ？」

くだらないと思いつつ、先を促す相槌代わりに訊ねる。

「マシーナライ機人マシーナライの中の機人。完全に機械化された一箇師団を単独で撃破し、あらゆる火器や機械車両と接続して支配下に置き、無線の傍受や妨害も思うがまま。まさしく機人の神　故に称してマシーナライ・ゴット機神」

「戦争中に、味方に似たような話の最強の機人部隊がいるっていう噂を、俺も耳にしたことがある」

タバコの煙を吹き出しながら、トランは言った。

「ま、その時は俺も、前線の士気を鼓舞するためのハツタリだと思ってた。それで味方が優勢になったなんて話も聞かなかつたしな」

「それがクロエ　あの機人の子とどういう関係があるのよ」
「知らん」

あつさりトトランは否定した。

「兄さん、ふざけるのもいい加減に

「知らんが、ウチの族に、あのガキと機神が関係があるト話を持ち込んできた男がいてな」

トランの口から「ウチの族」という言葉がさらりと出て、チャムは胸が塞がれる想いがした。やはり今のトランは機族の側の人間なのだ。

そんなチャムの想いをよそに、トランは話を続ける。

「そいつは、あのガキとガキが引きずって歩いてる棺のどちらかでも入手できれば、莫大な報酬と機神に匹敵するだけの力を与えるとウチの頭目に約束して、実際に高額の前金もぽんと支払った」

言いながら、トランのタバコを持つ手が小刻みに震えている。怯えているのだ。彼がもつともくつろげるはずのこの家で。しかも機族という強大な暴力を背景とした、代理人としてこの場にいるというのに。

その意味をチャムはほとんど直感に近い形で理解した。

つまり、ここはもう既に安全地帯ではないのだ。

血の気が一気に引いてゆくのが判った。今すぐ大声で叫びながらここから逃げ出したい衝動を必死に抑える。ダメだ。まだダメだ。まだ情報が足りない。自分と弟と妹。それとクロエが生き延びるためには、トランのもたらす情報をひと欠片だって無駄にはできない。

一方、手の震えに気付いたのか、トランは灰皿にタバコを押し付けて火を消し、結論を述べた。

「チャム、あのガキを売れ」

「いやよ」

自分でもびつくりするほど即座に答えていた。

「何故だ？ 素性の知れないただの旅の機人じゃねえか。お前が拾わなけりゃあ、街道であるまま野垂れ死んでたガキだ。ほんの数日、それが延びただけでもお前のやったことにはおつりが来る。まして

や、お前や弟や妹達の命と天秤に掛けて釣り合う相手じゃねえ」

「やめて、兄さん」

「いいか、チャム。本当だったら、こんなチャンスはないんだ。俺が族の整備班長だから、あいつらは俺にチャンスをくれたんだ。

それに今なら、お前の協力を強調して、分け前を多めに分捕つてくることだってできる。その金で、お前も、弟や妹も、ウチの親父やお袋もみんな一緒に、こんなクソみたいな土地は捨てちまえばいい。こんな人の命が安すぎる土地じゃあ、どいつもこいつも、いつか何かを踏み外して簡単にこの世とおさらばしまっつ。

もう、うんざりだ。お前だってそう言ってたじゃないか」

「いやだ。いやだ、兄さん！」

トランはソファアールから立ち上がり、耳を塞ぐチャムの腕を掴んだ。「聞け、チャム。俺はお前を死なせたくないんだよ！ お前だけじゃない、弟や妹もだ。あれだけ世話になった叔父さんの子供たちを、俺が何で死なせたいと思うんだよ！」

そう必死に喰い下がるトランの表情は、家を出る前の優しい従兄のそれに戻っていた。

「でも……でも……！」

「チャム！」

チャムの腕を掴んだまま大声で怒鳴るトランの後頭部を、冷たい何かの小突いた。

「……そのくらいにしておけ」

「クロエ！」

「……ご本人の登場かよ」

皮肉な口調で呟くと、トランは両手を肩の上にあげて、クロエの方に向き直った。

「やる気満々つて格好だな、おい」

どこから持ち出したのか 勿論、あの棺の中に隠していたのに 違いはないのだが 左腕には多銃身の重機関銃、左手には分厚い防弾盾の下から太い金属の杭が覗く。それぞれ腕に直接装着されて

いる。肩には、防弾衣というよりは発砲時の振動制御とおぼしき
バラストが載っていた。背中に背負っている長い筒状のものは、無
反動砲の発射筒ランチャーだろうか。

トランに向けられているのは左腕の方で、この至近距離から発砲
されたら、おそらく上半身はきれいに粉碎されて血煙と化すだろう。
短躯のクロエにこんな重装備を施すと、ますます中世の騎士の悪
趣味なディフォルメに見えてくる。

だがそれに臆することなく、トランは言っただけだ。

「お前さあ、死んでくれねえか？」

「……………」

「事情はさつき聞いての通りだ。お前が機神マシーナリイ・ユエトだか何だかと、どう係
わり合いがあるのが知ったこっちゃねえが、どう見たってお前がウ
チの人間捲きこんで迷惑掛けてるだけだろうが。」

俺はこの娘達を死なせたくねえ。そのためだったらなんだってや
ってやる。

お前だって、命を救われた借りがあんだろ。その借り、この場で
きちんと耳を揃えてこいつに返してやってくれや」

「……………嫌だ、と言ったら？」

「バイクやら機械車やらで編成された二〇〇輜トライブからなるウチの族の
連中が雪崩込んで、ここはめちゃくちゃになる。機人のお前さんが
生き残れるかどうかは知らんが、生身の人間で生き残れる奴はまず
いない。」

それに包囲網はとくに完成している。どこかを突破して逃げ出
せるだなんて思うなよ。どいつもこいつも、ほんの五、六年前まで
本気で同盟ペテランの機械化部隊と殴りあってた奴らだ。対機人戦闘に
慣れきった熟練兵が火力と機動力をたっぷり使って用意したフルコ
ースだぜ」

「……………」

しばらく無言でトランを睨んでいたクロエだったが、

「ひとつだけ訊く。さっきお前が言っていた、この話をお前たちの

トライアン
族に持ち込んだ男は、今でも一緒に行動しているのか？」

「いいや。どこかで首尾を眺めているそうだが、それがどこかまでは知らない」

「そうか」

小さく肯くとクロエは銃口を下げた。

「頭目に伝える。一〇分後に正面の門から出てお前らの包囲網を突破する。代わりに、こいつらには手を出すな」

「ダメよ、殺されるわ！」

「チャム、黙れ」トランはクロエの方だけを見て言った。

「こいつは、自分の引き起こした問題に自分でケリをつけようとしているだけだ。その覚悟と意思を持った奴を、横から口を挟んで邪魔をするな。」

……お前の言葉、確かに頭目に伝える。だが、最後に追加した条件に意味はないぞ。取引になっていないからな」

「わかつている」

再度肯くクロエに、トランは小さく鼻を鳴らし、そのまま部屋を出て行くこうとした。

その背に、チャムは絶望的な予感とともに、これだけは訊いておかなばならない問いをぶつけた。

「待って兄さん、クロエを拾った時の話、誰から聞いたの？」

「……さあな、誰だったかな」

トランはそうとぼけたが、チャムはその事実の持つ意味に律然とした。

確かにクロエの存在を隠す努力こそしなかったが、積極的に宣伝して廻ったこともない。外に出たのは村外れの廃品回収の現場での仕事のときくらいで、そこを見られたからといってクロエがどう拾われたかまで判るはずがない。結局、クロエを拾った時の状況を知るのは、自分と後は

「もしかして、叔父さん達の身に……」

「そっちは息子の俺が何とかする」トランはきっぱりと言った。

「お前は気にしなくてもいいんだよ」

そういつて背中越しに微笑むその笑顔は、紛れもなくかつての優しい従兄あにのものだった。

「五分で出る」

トランが立ち去るや、クロエは厳しい口調で宣言した。

「五分！？ でも、さっきは一〇分って……っ！」

「やつら機族がそんな約束を守ると思うか？ お前は子供たちを連れて地下室に隠れてる」

辺境の村々では、軍隊や大規模な機族の襲撃に備えて各家に避難壕タウが設けられるのが常で、その場所は他家の者やよそ者には絶対に教えない。勿論、クロエにもまだ教えていない。だが、辺境の常識として「ある」という前提で、クロエは話を進める気のようにだった。「そんなの、二〇〇輛もの機族に攻め込まれたら、すぐに見つかったちやうわよ！」

「大丈夫だ。半分は俺が潰す。残り半分も、頭目を片づければ引き上げる。そうでなくとも、奴らの意識は俺と棺ケツに集中して包囲が崩れる。そこまでの時間さえ稼げればいい。後は、隙を突いて脱出する」

「あんたはどうなるのよ！」

「俺は……死なない」左腕の機銃の留金ラッチを確認しながら、クロエが答える。

「俺にはまだやることがある。たとえ表で待つてる機族を塵みじんにしても、ここでは死ねない」

だがそれは、戦いに赴く戦士の決意というより、冥界の屍者が裁き受け入れるための呪文を唱えているようで、聞いていてチャムは胸が苦しくなった。

そしてチャムは気付いた。

そうか。そうなのか。

こいつもあたしと同じなんだ。

いろんな現実を、つらくて厳しい現実を、「それが現実なんだ」

「当たり前のことなんだ」って呑み込もうとして、傷ついて泣きそうになっている自分を押し殺して誤魔化そうとしている。

でも、きつとそれじゃダメなんだ。

「待って！」そのまま行こうとするクロエの前に廻って肩を掴む。

「『死なない』とか『死ねない』じゃダメなの。『生きる』の。あんたも、あたしも、みんな、『生き』なくちゃダメなの！」

一気に言つてのけてから、我に還る。いきなりこんなことを言っても、通じるわけがない。それもこんな非常時に。

我ながらかなり痛い言動だったかと頬が赤くなるチャムに、クロエはふつと苦笑した。

「……お前、変な女だな」

「う、うるさい！」

「いいさ。約束する。俺は生き延びる。」

だからお前も約束しろ。何があっても生き延びろ」

こくりと肯くチャムに、クロエは続けた。

「俺からも、ひとついいか？」

「……な、何よ？」

しばらく言葉を探しているような間を措いてから、切り出した。

「お前は間違っていない」

「え……？」

「お前がこの村を捨てなかったのは、勇気がなかったからじゃない。大切なものを捨てないって、お前が自分の意思で判断して、決めたことだ」

「……違いわ。そんなんじゃない。切り捨てる勇気がなかっただけ。そのくせ、誰かが代わりに決断してくれて、勝手に目の前からいなくなってくれて、それで『しょうがなかった』って受け入れるのを待っているだけよ」

「違う」クロエは力強く否定した。

「お前はここにいることを選んだんだ。いつでもすべてを捨てて逃げ出せるって知っていても、それでもここを選んだんだ。辛くても

苦しくても、おまえが大切に思う人たちのために、ここに残ることを選んだのはお前の意思だ。それがお前の勇気だ。

胸を張れ。お前は間違ってるんじゃない。おまえ自身の勇気を信じろ！」

自分よりずっと小さな背丈の、この機械仕掛けの少年が、普段の仏頂面をかなぐり捨てて、真っ赤な顔で自分を励まそうとしている。これから一番危険な場所へ、二〇〇対一の最悪の戦場に身を投じようとしているのは自分の方なのに。

それが何か可笑しくて、チャムは思わず吹き出していた。

「……って、お前……笑うところか、ここで……？」

「だって、しょうがないじゃない。あんたにそんなこと言われるなんて、可らしいんだもの」

言いながら、しかし同時にぼろぼろと自然に涙が溢れてくる。

「おい、お前……」

「大丈夫……大丈夫よ」

そつだ。もうあたしは大丈夫だ。二〇〇台の機族に囲まれてたつて怖くない。大切なものを全部守りきって、生き抜いてみせる。

目元の涙をツナギの袖でぐいっと拭い、チャムは不敵な笑みをクロエに向けた。

「行くわよ」

「おつ」

クロエもまた、はじめて見せるような楽しげな面構えで応える。

そつだ。これが、あたしの勇気なんだ。

チャムたちのいるスクラップ工場は、不発弾や燃料、機械油などの危険物質を取り扱うこともあり、村の中心からは外れた郊外の窪地の底にある。

包囲する側としては見晴らしの良い場所をいくらでも確保できるという点で最良の標的で、機族の頭目以下、中核となる司令部部隊はもっとも高い丘の上に陣取っていた。

「戻ってきました」

土煙を上げて一直線にこの丘に向かってくるバイクを認め、兵士の一人が車上の頭目に告げる。

帝国の主力戦車をベースに、大口径の動力機銃をハリネズミのように所狭しと搭載したこの機械車の車長席で、肩から両腕を機械化した頭目がふんと鼻を鳴らす。

ほどなく、頭目の戦車のそばまでたどり着いたバイクからトランが転がるように下りると、膝をついて報告する。

「標的を確認しました。棺かぶつについては確認できませんでしたが、既にこちらを警戒して武装しています。左腕に動力機銃、右腕にパイールと防弾盾。肩に無反動砲らしき発射機ランチャーを背負っています。家のもの人間の協力は得られませんでした。一〇分後に正面の門から出てくると」

「そうかい」トランの報告を、頭目はずまらなさげに聞いていた。

「しかし、作戦前に敵に情報を洩らすのはいただけねえなあ」

「は……？」

当惑するトランの身体を、横にいた兵士が引き起こす。

「おい、何しやがる！」

兵士はトランの胸元をから小さなワイヤレスマイクを抜き取り、にやつく表情で目の前に掲げて見せた。

「つまんねえ里心出すんじゃないかねえかと心配して保険を打ってやれば、

この様だ。つくづく使えねえ奴だったな、お前は」

「ま、待て。俺は仕事はちゃんとこなしてきた！ 奴の装備もこの目で確認したし、敷地内に立て籠もらないよう、手も打ってきた。文句を言われる筋合いはねえ！」

「トラン、トランよ。俺は、そういうことを言ってるんじゃないやあねえんだ」

頭目は哀しげに首を振って告げた。

「部下思いの俺は、お前の心の問題を心配してやってるんだよ」

「……こ、心……？」

「そうさ。両親を人質に取られて、トライプ族を挙げて実家に攻め込まれるとなりやあ、誰だって心穏やかじゃいらねえ。人間だものな、当然だ。

おまけにお前は、機械いじりを理由に、普段から村の焼き討ちにも参加しねえ、奪った女達にも手をつけねえ、そういう底抜けのお人好しじゃねえか。

そして、そういう奴がここ一番って時に致命的なポ力をやらかす。だからでかい作戦前にリスクをヘッジ排除しておくのは指揮官の当然の務めじゃねえか、な？ どうだ、納得してくれたか？」

「待て、待ってくれ頭目！ カシラ俺がいなくなったら、この族の車輛整備はどうなる？ こんな二〇〇台もの急な全力動員で、一台も故障なしでここに持ってこれてんのは、この俺が整備してきたからだろうが！ 俺がいなくなったら、お前ら」

「バカ、お前、腕のいい整備士なんて、金でいくらでも雇えるじゃねえか。その金を稼ぐためのこの作戦で、それを成功させるために死んでくれて言ってるのが、まだ判からねえのか？」

「……………っ！」

憤怒で眩暈を覚えた。違う。理由なぞどうでもいい。要は、久しぶりの大戦を前に、血の匂いを嗅いで氣勢を上げたいという、ただそれだけに過ぎないのだ、この獣どもは。それがたまたま自分になったのは、普段からこの野獣ケタモノどものいかれた嗜好から距離を置いて

いたのが疎ましく思われたからに過ぎない。それで自分達の生命線とも言える整備士に手を掛けやがるか、こいつら。畜生、血迷いやがって。本物の野獣どもめ。

怒りに貌を歪ませながら、それでもトランは頭目に訊ねた。

「判った。俺のことは、判った。……だが、親父とお袋はもう関係ねえだろう。解放してやってくれ」

「心配はいらねえよ」頭目は満面の笑みで微笑んで告げた。

「先にあの世で待ってるだよ」

「頭目あーっ！」

腰の拳銃を抜こうとしたトランへ、戦車の動力機銃のひとつが火を吹く。

真正面から次々に襲い掛かる機銃弾に、トランの身体は狂った人形劇のようにくるくるとその場で旋回し、砂だらけの地面に叩きつけられた。

「奴が出てきました！」

監視の兵からの報告に、頭目は双眼鏡をスクラップ工場の門前へと向ける。

白いオンボロコートにつば広帽、背中に自分の背丈よりも大きな白い棺を背負い、あとはトランの報告どおりの重武装に固めた小さな機人の少年が、周囲を睥睨するような傲岸不遜な面構えで立っている。

頭目は薄く唇を舐め、小さく嗤った。

たった一人で、この人数と本気で殺りあう気が、あのガキ。

「よおし、野郎ども！ おっ始めるぞ！」

頭目の激に応え、兵士達が獣のような歓声を上げる。いつせいに無数のエンジンが咆哮し、バイクや機車が次々と動き出す。

地に伏したまま、目の前に近づいてくるキヤタピラのパネルを眺めながら、トランはぼんやりと思った。

畜生。戻ってくるんじゃないかった。やっぱりこの村はくそっただ。

チャム、お前もさつさとこんなところから

最初に突っかけたのはスクラップ工場のそばの窪みに伏兵として潜んでいたバイク部隊だったが、ほとんどそれを予期していたかのようなクロエの機銃により、飛び出した瞬間に三台まとめて吹き飛ばされた。

そこへ少し離れた場所からの機関砲の集中射撃。この辺りの一般家屋なら数秒で倒壊に追い込む破壊力の砲弾を、棺を盾に防ぎきる。あれだけの集中射撃をすべて弾きかえず棺の強度に驚いたのか、近距離に配置された装甲車群からの発砲が一瞬、止まる。

そこへすかさずクロエは空へと向けた無反動砲から、数発のロケット弾を放った。曲射弾道を描いて標的上空まで到達するや、装甲の薄い車体上面に襲いかかり、形成炸薬弾頭によつて装甲を喰い破つて高熱の熱噴流を流し込む。これで五台が喰われた。最至近からクロエを押さえ込む役割の部隊は、ここにあつさりと壊滅してしまつたことになる。

ここまで、始まつて三分と経っていない。もつとも、彼らの役割は続く第二線の部隊が襲撃配置に就くまでの時間稼ぎで、全滅したとはいえ、クロエの初動を遅らせただけでも役目は充分に果たしたことになる。

クロエもまた、その意図を正確に理解していた。

無反動砲の発射後、クロエは棺を背負つて即座に移動を開始する。先ほどの攻撃の間に距離を詰め、襲撃配置についた第二線部隊が、すぐに射撃調定を終えて攻撃を開始することが判っていたからだつた。

巨大な棺を背負い、全身を驚くほどの重装備で固めたクロエは、だがまるで羽でも生えているかのように軽やかに、門前の緩やかな斜面を駆け上がる。

それを見た周囲のバイク部隊が一斉に発砲を開始するが、予想外

のクロエの動きに追いつかず、一発も当たらない。

あつ、と気付いたときには、クロエは第二線の装甲車の一台に取りつき、右腕のパイルの一撃で側面からエンジン部分を貫いていた。それに留まらず、即座に次の獲物を求めて移動を開始。バイク部隊の動きを左腕の機銃で牽制しつつ、無反動砲とパイルで次々と第二線の車輛群を屠つてゆく。

「くそつ、何だ、あのガキの動きは……」

「まさか、あれが機神マシーナリー・ゴッド」

「バカ野郎！ あんなちんけなりの神がいるか！」

臆する部下に怒鳴りつけると、頭目は野線電話の受話器を取った。

「自走砲部隊の連中につなげ」

「待ってください、頭目カシラ。まだ第二線の連中が奴と交戦中で」

「バカか、お前は？」 頭目は参謀格の部下に冷ややかに言った。

「餌に喰らいついてる間に網を掛けないでどうする よおし、全車一斉射撃、いいからぶつ放せ！」

丘向うに配置された虎の子の自走砲五輛から放たれた大口径の砲弾は、急行列車がまとめて突っ込んでくるような飛翔音とともにクロエと第二線部隊の頭上に襲いかかった。

棺ひつねをその場に放り出して、クロエはたった今、エンジンをパイルで貫いた装甲車の下に潜り込む。

同様に反射的にバイクを捨てて物陰に隠れようとした者もいたよ。うだが、大部分の機族の兵士たちは、上空でぶち撒けられた榴散弾のベアリングによって全身をずたずたに引き裂かれた。装甲車部隊はともかく、第二線バイク部隊は、これによって一掃された。

しかし、その間に第三線部隊が襲撃配置に移動を終えていたことが、戦局を変えた。

装甲車の下から這い出したクロエが移動しようとして身を起こした瞬間、猛烈な一斉射撃に射すくめられ身動きが取れなくなった。

やむなく装甲車の背後から左腕の機銃や無反動砲で反撃を行うも、周囲の窪みなどの地形を利用して濃密な火点を構築している敵にはなかなか当たらない。バイク部隊も、うかつに飛び出しては来なくなった。こちらの間合いが掴まれたのか。

状況は完全な膠着状態に陥りつつあり

「バーカ、膠着状態なんかじゃねえ。機人狩りの必勝パターンじゃねえか」

愉快そうに頭目は嗤い、野線電話越しに自走砲部隊へ第二射の一斉射撃を命じた。

「やれやれ、すっかり追い詰められやがって」

戦場全体を見渡せる小高い丘の上で、モンスターバイクにまたがった男は、モニターグラスを眺めながら、あきれたように呟いた。

視線の先には、雨あられと降り注ぐ榴散弾や横殴りの銃撃の吹き荒れる暴風圏を、自身と棺おくの装甲性能で押し切ろうとして悪戦苦闘するクロエの姿があった。

個体戦闘能力に優れ、時に火力や機動力にも優れる機人マシーナリイを斃すには、ふた通りの方法がある。ひとつは同クラス、あるいはそれ以上の個体戦闘能力をもった別の機人マシーナリイで対抗するやり方。もうひとつは、絶対に敵の有効殺傷圏内には入らず、その周囲から銃撃で射すくめて機動力を奪い、その隙に遠方から広域破壊能力のあるスタンドオフ兵器でまとめて吹き飛ばす。まさに今、機族の連中がクロエを相手にやっているのがそれだ。

同時に、それを実行する側にも、柔軟な部隊運動能力が要求されるのだが、目の前の機族は充分にそれを持ち合わせていることを証明してのけている。加えて、味方を巻き込むような攻撃にもひるむことなく、依然旺盛な戦闘意欲を失わないとなれば、よくよく指揮官の統率能力が高いのだらう。勿論、どんな方法でその統率が保たれているのかまでは、彼の知ったことではない。

結局、どんなに優秀な機人であろうと、こんな昼の日中に、遮蔽物もろくにない開けた場所で、良く経験を積んだ優勢な火力を持つ戦闘部隊と真正面から激突すればこうなる、という見本のような話に事態はなりつつあった。

だが、それはやる前からクロエ自身にも判りきっていたはずだ。

足元の戦場で、至近距離で炸裂した砲弾にクロエが吹き飛ばされる。そのまま地面の上をごろごろと転がり、露出した岩肌に着中からぶつかって動きを止める。立ち上がる余力もないのか、そのままびくりとも動かない。

それを見て、機族達も攻撃の手を止めた。代わりに慎重に部隊を前進させ、包囲網を狭めてゆく。

ここまでか。

だが

「なぜ、棺つひを使わない、クロエ？」男はひどく冷たい声音で告げた。「そこまで追い詰められて、なお避けるか。しかし、それではたどり着けんぞ」

男はモニターグラスを下し、クロエが必死に距離を稼ごうとしていたスクラップ工場に目をやった。

「なるほど。確かにこれは俺の仕事だな」

男は引き絞るように喉を鳴らすと、バイクのグリップに組み込まれたボタンを強く押し込む。

バイクの車体後部両脇に据えつけられたサイドケース上部のスリットが開き、平べったい弾頭のミサイル群が顔を出す。

「クロエ！俺がおまえの枷かせを解き放つてやる！」

哄笑とともに叫ぶ男の言葉とともに、二〇発以上ものミサイルがサイドケースを飛び出して上空へと跳ね上がる。ミサイルはある高さまで達すると、軌道変更用の側面ブースターによってほぼ直角に進行方向をねじ曲げ、今度は男によって指定された地上の目標へと殺到した。

チャムと子供たちが息を潜めて待つ、スクラップ工場の敷地上空

7

「思ったより手間取ったな。最終的な損害はどのくらいになる？」

「一〇パーセントから一五パーセントと言ったところですよ」

参謀格の部下の言葉に、頭目は小さく鼻を鳴らした。

正規の機甲部隊でこの損害なら大損害だが、今回の損害は第一線、第二線の将兵に集中している。元より損害は織り込み済みで、新人や反抗的な態度の者達で構成された部隊だった。この作戦の成功で入る金さえあれば、換えなぞいくらでもきく。

「いいだろう。俺達も前進だ。包囲網が完成したら、形成炸薬弾をありったけ叩き込んで、タコ殴りにしてやれ」

周囲の司令部要員を引きつれ前進した頭目の視界の先に、横たわるクロエの姿が見えてきたその時、突如、爆轟が戦場に響き渡った。

「何事だ!？」

「あれを」

部下の指差す方向を見れば、スクラップ工場の屋敷に巨大な炎の柱が吹き上がり、なお爆発を繰り返している。おそらくは敷地内の燃料や機械油などに引火したためかと思われる。だが、頭目からは特に屋敷への攻撃は命じてはいない。クロエがバカ正直に出てきてくれたので、屋敷を攻撃していぶりだす必要がなくなったためだ。

あるいは、屋敷の者がこちらの意識を惹かせるために自爆でもしたのか。クロエに脱出のチャンスでも与えるために……。

が、その時、獣のような唸り声が低く、静かに聴こえてきた。

音源を求めて視線を向けると、クロエがゆっくりと立ち上がるようとしている。

既に左腕の動力銃はなく、肩の無反動砲の発射筒も途中でへし折れて使い物にならない。足元がふらつき、立ち上がることにそのままならないその身体で、今更、何が出来るというのか。

だが、周囲を取り捲く兵士達は、誰もがクロエが放つ異様な威圧

感に圧倒されていた。

クロエが小さく呪詛のように何かを呟きながら、歩き出す。

「……貴様ら……貴様ら……貴様ら……っ！」

「何を言ってるんだ、あいつは？」

「いえ、声が小さくてよく聞こえなくて」

幽鬼のような足取りで、爆風で吹き飛ばされた際に離れてしまった棺のそばまでたどり着く。

「棺よ！」

クロエは睜いた瞳で棺を凝視し、魂までも叩きつけるように叫んだ。

「棺よ、力を貸せっ！」

棺の蓋がシャッター式に瞬時に開く。中から跳ね起きるように黒衣の人間 いや、首から上がなく、胸から腹にかけてもがらんとうの、まるで人間の殻のような何かが顕れる。

いや、しかし、これは……

「強化外装骨格……？」

戦時中、軍で聞いた新兵器の噂。人間が生身で機人と対抗できるようにするための、機械の鎧。だが、人間が中に入るのだから、そんなに小さくはなかったはずだ。これではまるで子供しか着れない

「まずい。攻撃を再開しろ」

「は……？」

「あの鎧を、今すぐ破壊しろと言ってるんだ！」

事態をすぐに呑み込めない部下の胸倉を掴み、頭目が怒鳴りつける。

だが、既に遅かった。

鎧が襲いかるように背後からクロエの身体に覆いかぶさる。クロエの機械の手足を取り込んで、装甲パネルが次々に閉じてゆく。その表面から飛び出す長い針のようなネジが、クロエの身体と鎧を抉り抜くように自動的に旋回して締まってゆく。

「おおおおおおおおおっ！」

苦痛とも歓喜ともつかない表情にかお貌を歪ませ、クロエが咆哮した。

「撃て！ 撃て！ 撃て！」

頭目の命令に、鎧と一体化したクロエに向けて我に還った兵士達が一斉に発砲を開始する。

しかし、その銃弾が届く前に、クロエの姿はその場から掻き消えていた。

「何っ!？」

次の瞬間、見当はずれの方角から、金属が無理やり断ち切られるような音が響き渡った。見れば、車体を中央で切断された装甲車が、真ん中からへし折られるように攔座^{かくざ}し、その前に、引き締まった長身の黒い影が立っている。それが、鎧を装着したクロエだと気づいた瞬間、真つ二つになった装甲車の弾薬が燃料に引火し、衝撃波と共に辺りを爆炎に捲き込んだ。

バカな。さっきの場所から跳躍でもしたのか。人間技 いや、
機人であっても、こんなふざけた距離を……。

啞然とする頭目をよそに、恐慌状態に陥った兵士達はめいめいに勝手に発砲を開始する。

だが、兵士達の中に飛び込んで、目にも留まらない速度で走り廻るクロエの姿を誰も捉えきれない。その右腕から伸びる刀身が、鬼火のような燐光を放ちながら、あらゆる物体を切断する。

戦場を再び爆轟と悲鳴が支配し始めた それもごくごく一方的な支配と蹂躪。

「いかん。距離を取れ。敵の間合いで勝負をするな！」

そう命じはしたものの、前線で取り付かかれている連中はどうにもならない。そう即座に割り切る。その間に、後方で装甲火力を集中し、まとめて吹き飛ばすしかない。

だが、手近の将兵をまとめて離脱しようとする部隊を目ざとく見つけると、クロエはすかさずその後背に襲い掛かり、屠殺場と化し

た戦場に押し戻す。誰一人、生かして返す気はないかのようだった。それでも所詮、敵は機人が一体。部隊の統制を取り戻し、組織的な反撃を行えば斃せない敵ではないはず。しかし、野戦電話の受話器はざらついた空電ノイズを発するばかりで、どこにも繋がらない。

「どうなってる……？」

焦りながら何度も野戦電話のフックを叩くその背後、ごく近い距離で腹に響く機関砲の発砲音。

「やめる、同士討ちだ！」「コントロールが効かないんだ。勝手に砲が動き出して」

暴走した装甲車に、兵士が無反動砲を撃ち込んで、中の乗員もろとも沈黙させる。

そこかしこで同じような現象が発生し、部隊は確実に混沌の渦へと捲き込まれてゆく。

「いつたい、何が……」

前線で暴れ廻るクロエに視線を向けた。バイク兵を輪斬りにし、装甲車を正面から叩き割ったクロエが、肩越しにこちらを振り向く。爆炎に逆巻く黒い長髪の合間から、悪魔のように赤く輝く瞳がこちらを見ている。

それを見た瞬間、そこに至る理屈も何もかも無視して、頭目はすべてを理解した。

「機神」

マシーナライ
マシーナライ・ゴッド

機人の中の機人。完全に機械化された一箇師団を単独で撃破し、あらゆる火器や機械車両と接続して支配下に置き、無線の傍受や妨害も思うがまま。まさしく機人の神。……。

ダメだ。これはダメだ。

自分達では相手にならない。次元が違う。神に人が喧嘩を売る？ありえない。ありえないだろう。

頭目は即座に決断を下した。

「総員、撤」

「おいおい、ここまでできてそれはないだろう」

耳元で囁く声に振り返ると、黒いフルフェイスのヘルメット

この仕事を持ってきた、あの男が砲塔の上で腰を屈めている。

「せっかくここまでお膳立てしたんだ。最後まで楽しませてくれよ」

「あ、あんた、一体……あれは……？」

「そ。ご推察通り、君ら機族が噂する機神（メカニカル・ゴッド）、その一体　まあ、ど

つちかつていうと、欠番品（ロス・ナンバー）になるんだけどね。でも、どうでもいいか、そんなこと」

男はすつとその場で立ち上がると軽やかに跳躍し、いつの間にかそこに停めていたモンスターバイクの上に降り立った。

「あんたもそんな愉快な乗り物に乗ってるんだ、参加しないって手はないよな」

「おい、あんた、何を言ってる」

「ほら、発車オーライ」

ぱんと男が手を叩いた途端、戦車の全電装系が起動し、車主の意思を無視して急発進した。

「待て、止まれ。畜生、どうなってる!？」

頭目と接続されたこの戦車は、車主の意思には絶対服従で駆動するはずなのに、今は彼の指示を無視して全速力で戦場を突っ切ろうとしている。

「やめろ、やめろ、やめろ!」

目の前の兵士やバイクを踏み潰し、邪魔な装甲車輛には機関砲や戦車砲まで撃ち込んで力づくで戦場に道を拓き、一直線に進んでゆく。だがその先には

「あのガキか？　あのガキのところに向かっているのか？」

心臓をわし掴みにされる。ダメだ。ダメだ。ダメだ。

だが、砲塔の上の車長席で振り廻される身では、どうすることもできない。至近距離で流れ弾の機関砲が炸裂する。跳弾が額のすぐそばを弾け飛ぶ。すでに混乱しきった前線に強引に割り込んだ頭目の戦車は、車輛を弾き飛ばし、バイク兵を踏み潰し、窪地や岩場を

踏み越えて驀進する。

「やめてとめてやめてとめてやめてとめてやめて　っ！」

もはや恥も外聞もなく、頭目はあられもない悲鳴を上げ続ける。

やがて、戦車はカウンター気味に派手に後尾テールを振り、そこにあった装甲車を一台跳ね飛ばすと、唐突に停車した。

ほっと安堵の吐息をついた頭目が顔を上げると、そこには極北の氷雪を思わせる冷えきった視線でクロエがこちらを見ていた。

その視線から目を逸らせずにいる頭目の手元で、野線電話のベルが鳴った。

『やあ、ステージについたみたいなので、ハンドルを返すよ』

「な……、待て、貴様！」

呼び留めたものの、既に回線は途切れていた。

「クソっ！」

受話器を叩きつける。

眼前のクロエがゆっくりとこちらに近づいてくる。

「ひいっ！」

悲鳴と同時に、頭目の動揺と連動してか、車体各所の動力機銃が稼働する。そうか。車体との接続は回復している。

「くたばれ、くそガキ！」

車体前面の動力機銃が一齐に火を吹く。まるで噴火する活火山のような勢いで、真っ赤に熱せられた銃弾が放たれる。

同時に、戦車を全速で後進させる。動力機銃の銃撃くらいでクロエを喰えるとは思っていない。それどころか、移動し続けなければ、喰われるのはこっちの方だ。

案の定、動力機銃からの銃撃は、クロエを捉えることができなかつた。だが、動きを牽制できるだけでいい。

銃撃を絶やさなのまま、ジグザグに後進し、必死に距離を取ろうとする。この距離では至近距離すぎて、戦車砲が使えない。

「邪魔だ、お前らどけーっ！」

今度ははつきりと自らの意思で部下達を踏み潰しながら、頭目が

叫ぶ。

畜生。畜生。畜生。こんなところで死んでたまるか！

銃撃を避けたクロエの姿が、戦車砲の射線上をかすめる。

今だ！

発砲　発射音が乾いた大気を震わせる。長い砲身内で既に音速を突破していた砲弾が、クロエに正面から襲い掛かる。

だが

「何だとー！」

クロエは砲弾を右腕の刀身で真正面から叩き割った。

断ち割られた砲弾の破片はともにあらぬ方向に跳ね飛んで、はるかに離れた場所で地面に突き刺さる。

そんな、バカなバカなバカなバカなバカなバカなバカなバカな……。

泣きながら首を振って現実を否定しようとする頭目をよそに、クロエは常人離れたダッシュで戦車まで近づくと、右腕のひと振りですべて砲身を斬り飛ばす。

声にならない悲鳴。

そこへ、野戦電話のベルが鳴った。

救いを求めて取った受話器の向こうから、嘲笑うような男の声が聞こえてきた。

『よう、いい感じで場をあつためてくれたな。でも、ここからは俺の見せ場だ。あんたは、この辺で退場していいぜ』

「おい、何を言ってる？」

問い詰めようとしたその矢先、受話器がするりと滑って砲塔内に落ちてゆく。

あれ、と見下ろすと、受話器を掴んだままの右腕が、砲塔内の機材にぶつかりながら車内の奥へと転がってゆく。

続いてぐらりと視界が傾き、砲塔の装甲が割れた。

そして、車主である頭目さえも知らぬ間に切断され、ぶつ切りにされた戦車の車内で燃料と弾薬が引火し、装甲片を辺りに撒き散ら

しながら大爆発を引き起こした。

「……………っ！」

目の前でいきなり爆発を始めた戦車から、クロエはとっさに後方に跳躍して退避しようとした。

だが、爆炎を突っ切って、巨大なバイクが飛び出してくる。

空中にいるクロエはそれを回避できず、モンスターバイクの前輪を真正面から受け留めて弾き飛ばされた。

「く……………っ！」

長い手足を振って猫のように身体を捻り、ダメージを最小にして着地する。

その姿を、モンスターバイクにまたがった男が見下ろしていた。

片手に構える長槍ジャベリンの穂先は、クロエの右腕の刀身と同じ青白い燐光を帯びている。

男は喉を引き絞るように笑い、言った。

「その棺ひつねにも、いい感じで馴染んできたようじゃないか、クロエ。

やっぱり何でも実際に使ってみなきゃ、だろ？」

「……………？（ツエーント）……………これは全部、貴様が……………っ！」

吹き上がる怒りもあら露わに、クロエはバイクの男を睨みつける。

？（ツエーント）と呼ばれた男は愉快そうに肯き、両手を大きく広げて見せた。

「そうさ。苦労したんだぜ。この辺で手頃な規模の機族を見繕って、適当に煽ってけしかけるのもひと仕事でな。とって、半端な連中が相手じゃあ、お前がその姿になるまでもなく片がついちまうじゃないか。

それなのにお前ときたら、あれだけ追い詰められても、まだ棺かぶつを使うことを躊躇いやがる。

おかげで、わざわざ俺がじきじきに手を下さにゃあならなくなっちゃまっただろが」

そう言つて顎をしゃくつた先に、スクラップ工場から立ちのぼる赤黒い炎を認め、クロエは絶叫した。

「? (ツエーント)っ!」

「火がつくのが遅すぎんだよ、お前はよおっ!」
クロエは大地を蹴つて? (ツエーント)へ呐喊する。

? (ツエーント)もまた、予備動作抜きでモンスターバイクの出力をいきなり全力に叩き込み、弾丸のような勢いでクロエめがけて突っ込んでくる。

「「おおおおおおおおおおおっ!」」

二匹の獣は、互いに一步も引くことなく激突した。

「? (ツエーント)っ!」

クロエの刀身がまっすぐに? (ツエーント)の喉を狙う。だが、その刃が届くより早く、? (ツエーント)は長槍の穂先をクロエに突き出していた。

クロエは穂先の付け根を左手で掴み、そこを軸に身体を旋回させて? (ツエーント)の頭部に蹴りを叩き込もうとする。

それを? (ツエーント)は異常な膂力^{りょりょく}で振り払い、クロエをバイクの後背へと投げ飛ばす。

一瞬の交差でまた距離が開いてしまったふたりだが、それぞれに即座に体勢を立て直し、反撃のポジションについた。

「へっ……いい感じに仕上がってきたじゃねえか。あの『亡き虫クロエ』がここまでやるようになるとはね」

「……黙れ」

「それでもいまだにママの亡霊を振り払えずに、与えられた武器もろくに使いこなせない。いつまでも昔通りの甘ったれで、俺はうれしいぜ、クロエ!」

「黙れと言ってるんだ、? (ツエーント)っ!」

再度、呐喊^{とっかん}を敢行するクロエへ、? (ツエーント)もまた咆哮とともにバイクを駆った。

「だから甘ったれだつて言ってるんだ、手前は!」

再度の激突　一瞬の交差の後、クロエの身体は大きく宙を舞い、やがて受け身も取れずに背中から落下した。

「ふん。まだこんなものか」

そう呟いたその時、不意に？（ツェーンテ）の頭部を覆うヘルメットが縦に真つ二つに割れ、豊かな銀髪が背中に流れ落ちる。

そして、そこに表われたのは、怜悧な美貌の若い女の顔だった。

女は小さく鼻を鳴らし、倒れ伏すクロエの背中に目をやった。

「なるほど。一矢報いるぐらいには力をつけていたみたいだな」

その声は、やや低めとは言え、先ほどまでとは打って変わった女の声だ。あるいはヘルメットに変声装置でも仕込まれていたのか。

と？（ツェーンテ）はかすかに眉を顰めると、戦塵に汚れる黄昏の空を見上げ、呟き始めた。

「はい。作戦は終了しました。クロエの現時点での能力限界値も確認済みです。……はい。はい。これより帰投します」

報告を終えた？（ツェーンテ）の表情に、わずかな憂いの翳^{かげ}が差す。だが、すぐに元の醒めた表情へと戻り、クロエに告げた。

「今日のところはここまでだ。だが、おまえが自分の運命を受け入れない限り、こんなことはいくらでも続くぞ。おまえが望みの場所にたどり着きたいのなら、まずは己の棺^{かひ}を受け入れろ、クロエ」

そう言い捨て、？（ツェーンテ）はモンスターバイクを駆って走り出す。

やがて残されたクロエは、傷ついた獣のような悲痛な慟哭をいつまでも上げ続けた。

再び元の短軀に戻ったクロエは、銃撃で穴だらけにされたコートとつば広帽子をほとんど意固地なまでに身にまとい、背中に背負った棺ひつぎをずると引きずりながらスクラップ工場を目指す。

生き残った機族の兵士たちがどれだけのか知らないが、とつくに逃げ去つたらしい。動く人影は見当たらず、人と機械の残骸が獣にでも喰い散らかされたように辺りに散らばっていた。

とつくに陽は落ちていたが、いまだに燃え続ける車輛の残り火などのおかげで辺りはさほど暗くない。

やがてスクラップ工場の敷地まで辿りついたクロエは、棺ひつぎを置いてその辺の燃え残りの資材を掘り返し始めた。火災は収まったとはいえ、普通の人間ならとても立ち入ることの出来るような熱気ではなく、燃え残りなぞ触れるものではない。

だが、クロエは何も言わず、黙々と作業に没頭した。

機械でできている部分はともあれ、生身の肉体の部分にとっては充分に苦痛であるはずだったが、クロエはうめき声ひとつ上げるでもなく、ひたすら作業を続ける。

あるいはそれは、何かの贖罪の行為であるかのように

「手伝おうか？」

「ああ……！？」

不意にかけられた声にクロエが振り返ると、弟達をその身にすりつかせたチャムが立っていた。

「でも、余熱が収まってからの方が安全だと思っけど」

「お、お前……？」

驚くクロエに、チャムは苦笑しつつ話した。

「ウチみたいな商売やっていると、たまに押し込んでこようとする機族なんかがいるのよ。それに引火すると危険な物質なんかいくらでも転がってるから、いざ火なんかつけられたら、見ての通りの有様

でしょ。そんなわけで、ウチの避難壕は結構造りがしっかりしてて、近所に入入り口も用意してあったってわけ。

まあ、そうは言っても、あれだけの数の機族に取り囲まれてると、ドンパチの真つ最中には顔なんか出せなかったんだだけだね」

チャムの説明に、クロエは「そうか」とだけ答えると、帽子のつばを真深に引きおろす。

その帽子の下でクロエが今どんな顔をしているのか覗いてやりた
い気もしたが、やめておく。代わりにすっかり焼け落ちたスクラッ
プ工場を見渡し、ぽつりと呟いた。

「全部なくなっちゃったわね」

「……すまん」

「何であんたが謝るのよ？」

「……今度の一件は、俺が招き寄せた。関係ないお前たちを捲き込
んでしまった。すまない」

「そうなんだ」

そう答えはしたが、そのことでクロエを責めようという気にはな
れなかった。

どういう理屈でそうなったのかの全体像がよく判らない、という
のもある。

だが、少なくともその分、この機人の少年は、全力で苛酷な現実
と立ち向かい、傷を負ってここにいる。さっきの泣きそうな顔で焼
け跡を掘り返している姿を見てしまった以上、この上、この少年を
責めるべき言葉などありはしなかった。

「……これから、どうする？」

クロエが訊いた。

「そうね。ま、工場は見ての通りだけど、当面、仕入れの心配はな
さそうだしね」

言って振り返るその先には、先刻の戦闘で壊滅状態に追い込まれ
た機族の残骸が、あちらこちらに転がっている。

「時間は掛かるかもしれないけど、きっとこの工場も立て直してみ

せるわ」

力強く宣言し、逆にクロエに訊ねた。

「あんたは？」

「俺は行かなくちゃならない」ぼそりと告げ、語り始めた。

「俺には斃さなくてはならない敵がいる。」

そいつは俺の母親の身体を実験台として切り刻み、さんざん弄んだあげくに殺した男だ。そして母親の身体で試した技術で俺をこんな身体に改造した。俺だけじゃない。俺と一緒に、幼い頃から一緒に育ってきた仲間達も、同じように手に掛けた。

そいつは今でも、この辺境のどこかにいて同じことを繰り返している。

俺はそいつを見つけ出して、殺す　ずっとそのことだけを考えて生きてきた」

「ねえ、その敵って、もしかして……」

「そうだ。俺の父親だ」

「……そっか……」

苛酷で異常な物語だったが、違和感はない。何となく、そのくらいのは背負っていそうな予感があった。

だが、そうか。彼はまだ旅の途中なのか、とチャムは思った。

それは、ここでのこの激しい戦いくらいでは終わらない、長くつらい旅なのだろう。

引き留めるべきか、彼とともに行くべきか……。

一瞬、脳裏をよぎったその選択肢は、しかし不安気に自分を見上げる弟と妹の存在を思い出したとたんに消え去った。

そうか。そうなのだ。

そうであるなら、いま自分がやらなくてはならないことは、ひとつしかなかった。

チャムは決意を胸に話し始めた。

「ねえ、クロエ。あんたが外で機族の連中と戦っていたとき、銃声や爆発音がする度にあたしはこの子たちと抱き合って震えてた。怖

くて怖くてたまらなくて、何度もここから逃げ出したと思って思った。でも、逃げなかった。最後までこの子たちを守る事ができた。それがあたしの勇気だって、あんたが言ってくれたから」
そう言って、チャムはクロエに笑顔を向けた。

「あんたは間違ってる。あんたの旅がどれほどつらくて厳しいものか知らないけど、あの言葉をあたしに届けてくれた。でもそれはきつと、あんたがここまでの旅で、自分で見つけた言葉だったから、ああやってあたしに届いたんだと思う。

だから、あんたがここへ来たことは、何にも間違ってるんじゃない。そう言い切って、最後にチャムは言った。

「あんたのその旅が終わったら、きつとここを訊ねてよ。それまでには工場だって立て直してみせるし、この子たちだって大きくなる。あたしだって今よりずっといい女になるわ。だから、きつと、絶対……生きて……」

最後の方は、随分とひどい顔をしているだろうな、と自分でも思った。それでも、届けなくてはいけないものがあつたのだ。今、ここで届けなくてはいけないものが。

祈るようにその瞬間を待つチャムに、クロエが口にしたのはたった一言だけだった。

「お前は、本当に変な女だな……」

だが、その時のクロエの穏やかな微笑みを、多分自分は一生忘れないだろうとチャムは思った。

あれからいろいろあって、工場も前より大きくなった。

この辺で最大の機族が壊滅したことで、多少は治安も良くなったのが効いてるみたい。暮らし向きは相変わらず大変だけど、自分も弟達も元気でやってる。

たまに風の噂で「棺を背負った機人の子供」の話を聞くわ。仏頂面で、愛想なしで、口下手な機人の子供の話。

そのくせ、苦しみをひとりで引き受けて、黙って地獄の底まで突っ込んでいきそうな、そんな危なっかしい男の子の話。

でも、今にして思うと、本当は、ただのお人好しだったんじゃないかって思うこともあるわ。

仕事の合間に手を休めて、そんなあんたが今頃どうしているんだろって考える。

ねえ、まだ旅を続けているの？

旅の仲間はどこ？

あんたが目指している場所へ、もうたどり着けたのかしら？

そしてもし道に迷ったら、旅を終えて次にどこへ行くべきか判らなくなったら、ここへ立ち寄りなよ。

たいしたもてなしも出来ないけど、愚痴ぐらいは聞いてあげる。

ここまでなら、あんたの旅が間違ってたなかつたことを、あたしが保証してあげる。

あんたがあたしの勇気を認めてくれたように、あたしもあんたの勇気を認めてあげる。

きつとみんな、そうやって自分の旅を続けているのだから。

> F I N <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0832/>

棺のクロエ1 棺と少年

2010年10月8日14時48分発行